

令和4年度小平市立小平第七小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

1 調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関するなどを児童が答える調査です。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸侧面等に関するなどを児童が答える調査です。

3 各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

- 国語の平均正答率は、全国・都の平均より低く、標準偏差のばらつきもやや大きかった。
- 「知識・技能」と比較して、「思考・判断・表現」の平均正答率の方が高かった。
- 「知識・技能」では、学年別に漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う問題、「思考・判断・表現」では、「B 書くこと」に関する問題の平均正答率が全国・都より低く、無回答率も高かった。

課題

- 「B 書くこと」では、文章全体の構成や書き方などに着目して、文や文章を整えたり、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けることに課題がある。
- 学年別漢字配当表に示されている漢字を書く問題で無回答率が高く、基礎的な知識を定着させる必要がある。
- 「C 読むこと」では、表現の効果を考えることに課題がある。

学校で取り組む具体的な改善策

- 既習事項の定着を図るため、復習を取り入れていく。
- 東京ベーシック・ドリル、タブレット・ドリルを活用し、基礎的・基本的な学力の定着を図る。
- 校内研究の「書く力を高める指導の工夫」の成果と課題を生かし、自分の考えを書く練習の積み重ねを行う。
- 文章構成やキーワードを中心に要点を整理したり、読み手を意識して文章を書いたりする活動に繰り返し取り組み、「書く力」の向上を図る。
- 日常的に読書活動を推奨し、読解力の基盤となる語彙力や理解する力を育てる。

【算数】

状況の分析

- 算数の平均正答率は、全国・都より低かった。
- 正答集計値では、全 16 問中 15 問正解した割合は、全国や都の平均を上回った。
- 算数は、「思考・判断・表現」より「知識・技能」の正答率の方が高い。
- 「A 数と計算」の乗法、「C 変化と関係」の比例や「D データの活用」の割合の正答率が低い。

課題

- 基礎的な計算はできるが、考察したり、比例や割合といった既習事項を用いて答えを導き出したりする問題を解く力に課題がある。
- 「B 図形」では、記述式の問題に対する無回答率が全国や都と比較して高いことから、自分の考えをもち、それを文章化する力に課題がある。

学校で取り組む具体的な改善策

- 基礎的な学習の習熟度の差が大きいため、個別に補充の問題を繰り返し行い、理解の定着を図る。
- 倍や割合の問題について、数直線を自力で書いたり、簡単な数値にして立式の方法を考えさせながら、正しく立式したりする力を身に付けることができるようになる。
- レディネステストで、児童の習熟度を捉え、実態に応じたグループ編成・授業展開を更に工夫する。
- 東京ベーシック・ドリルやタブレットドリルなどを活用し、既習事項を繰り返し練習し、基礎・基本の定着を図る。

【理科】

状況の分析

- 理科の平均正答率は、全国・都の平均より低いが、その差は小さかった。
- 17問中、11~14問正解の割合が、それぞれ10.9%と同数で多かった。
- A区分「粒子」の領域とB区分「生命」の領域において全国・都の平均正答率を上回るものもあった。
- 自分の考えをもったり、その内容を記述したりする問題の正答率が低かった。

課題

- 「自然の中で遊ぶということや自然観察をすることがありますか」という質問に肯定的な回答をした児童が、全国や都の値を上回っており、実験・観察に積極的に取り組む児童は多いが、理科への興味・関心にばらつきがあることは課題である。
- まとめ方や表現力には個人差がある。的確な予想や考察することや既習事項の定着が不十分で活用できていないことが課題である。

学校で取り組む具体的な改善策

- 学習ノートや学習者用端末を活用し、まとめ方の工夫をすることで、自分の考えをまとめる力の育成を図る。
- 自作プリントや東京ベーシック・ドリルを活用し、基礎的・基本的な内容の理解の定着を図る。
- 自然の中で遊ぶことや自然観察することへの興味を、理解への興味・関心に生かし、個別やペア、グループの活動で試行錯誤するプロセスを重視し、学びに向かう力の育成を図る。

【質問紙】

状況の分析

- 「PC・タブレットなどを使うのは、勉強の役に立つか」という趣旨の質問に対する肯定的な回答の値は、全国・都を上回った。
- 平日における学校の授業以外の1日当たりの学習時間は、学校が推奨している1日10分×学年よりも少ない児童が一定数(15.9%)いた。
- 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思うか」という項目に対する肯定的な回答が96.3%と高く、「友達と協力するのは楽しい」と思っている児童の割合も96.3%で全国・都と比較して高く、互いに思いやりをもって行動していることが分かった。

課題

- PC・タブレットの使用場面について、授業中に「自分で調べる場面」での活用頻度と比較して「学級の友達と意見を交換する場面」「自分の考えをまとめ、発表する場面」における活用が少ないことは課題である。
- 家庭学習の習慣を定着させる必要がある。
- 学習内容について、「分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができますか」という項目に対する肯定的な回答が全国・都と比較してやや低く、振り返りの活動を充実させる必要がある。

学校で取り組む具体的な改善策

- 学習者用端末の使用に慣れてきており、4月当初に比べ、調べるだけでなく自分の考えをまとめ、発表する場面での使用も増えてきている。しかし、児童が更に学習者用端末を有効利用していくためには、OJT研修などを通して、教員が教科の特性や学習の目的に応じたICT機器の活用方法を身に付け、指導に反映させていく。
- 「七小スタンダード」で本校が推奨する1日10分×学年に達していない児童がいることから、学習者用端末の持ち帰りに伴い、児童及び保護者に家庭学習の重要性を伝えていく。
- 令和4年度の「小・中連携の日」における、「学力向上」の取組を授業に生かし、どの教科でも学習の振り返りを重視することで、学習内容の定着を図る。